

『羊たちの沈黙』から考える人間像

藤 本 優

私は『羊たちの沈黙』という作品についてゼミ内で発表を行った。今まで自分が扱ってきた作品とはジャンルが異なり、サスペンスホラーとなっている。今回この作品を扱うに至った理由は、サスペンスになることで作品が複雑になり作品自体に味が出てくると感じたからである。そして、『羊たちの沈黙』から考える登場人物の心理分野からこの作品が何を伝えたいかを論じていく。

主人公である FBI 訓練生、クラリス・スターリングは、両親を失い孤児となり、モンタナ州にある母親の従兄弟夫婦が経営している牧場に預けられることになった。牧場に移ってから2ヵ月後のある夜、彼が子羊達を畜殺している現場をクラリスは目撃してしまう。彼女は子羊達を助けたいと思い、その1頭だけを抱いて牧場を出たが、結局保安官に見つかり、子羊も殺されてしまい、怒った牧場主によって、彼女はボストンにある施設に入れられてしまう。この時の子羊達の断末魔が、頭から離れず、「一つの命」を簡単に奪ってしまう叔父の行動にショックを覚え、生物の命を奪うことに人一倍敏感になり、これらが理由でクラリスの犯罪に対する憤りが増すと考える。

連続殺人犯のバッファロー・ビルは、裁縫とアジア産の大型の蛾を育てることが趣味で女装癖がある。殺害した女性の皮を剥ぎ、口に蛾の繭を入れた。男である自分自身が嫌いで変わりたいと常に思っていたとき彼自身の中で答えが出た。女性の皮で服を作り着ることで今までとは違った自分になれるとバッファロー・ビルは考え犯行に及んだとされる。当たり前ではあるが、それで何かが変わったわけではない。バッファロー・ビルの心が女性になれると思ひ込み、殺人行動をしているのだ。そして、蛾の繭を遺体の口に入れる理由は、男という自分自身が嫌っている性別から新しい自分へ、完璧な女性という蛾に変化するという彼のメッセージであると私は考える。

元精神科医であるハンニバル・レクターはバッファロー・ビルの治療も過去に行った。メディアで有名になる前にも、人を殺してしまう衝動を抑えたいバッファロー・ビルにアドバイスをする。ハンニバルは小説では人の死肉（特に内臓）を異常に好むカニバリズムであり、その部分は多く描かれている。彼も連続殺人犯ではあるが、認めた相手に対しては紳士的に接する。彼は自身が優れた知性と感性、豊富な知識を備えた人間であることに強いプライドを持っており、能力的に自分と近い者が現れた場合はそれが例え一側面に過ぎずとも異常な興味と執着を示す。バッファロー・ビルにもクラリス・スターリングにも同様な対応が見られる。

ではこれらを踏まえたうえで論じていきたい。クラリスの過去とバッファロー・ビル事件は全く関係がないわけではなく、クラリスの幼少期に叔父が子羊たちの毛又は皮を剥ぐこととバッファロー・ビルが被害者たちに行ったことである。そして、幼少期のクラリスは叔父に畜殺される子羊達を救おうと努力するが、幼さゆえに己の限界を知る。そして、FBI 訓練生になりあの頃のようにはならないという思いが無意識に正義感を強くする行動につながってくる。だが、この事件の最後の被害者であるマーティン上院議員の娘以外は救えないという結末になる。救いたくとも救えない己の無力さを実感することでは2つのことは類似してくる。これらのことから考えると題名になっている『羊たちの沈黙』の意味は「死んだ羊」と「死んだ人間」の関連性が重要になってきていることだ。沈黙している羊は単に鳴いていないことではなく、「死んでいる」ことを意味している。つまり、沈黙している人間は「死んでいる」こととも解釈できる。『羊たちの沈黙』とは「死んでいる羊」と解釈でき、人間を羊にたとえ「死んでいる人間」というバッファロー・ビル事件の被害者たちのことを表し、別な題名がつけられる。原作者であるトマス・ハリスはあえて“羊”を“人間”に例え沈黙が意味しているのは“死”であることを考え『羊たちの沈黙』という題名にしたと考えられる。

(指導教員 中村 敦志)